

こども目線の防災(2024年10月30日参考資料)

株式会社ステップ総合研究所長/NPO 法人体験型安全教育支援機構代表理事

日本女子大学非常勤講師 清永奈穂 (博士(教育学))

1. 変わる危機の諸相

期	危機爆発期		人的物的秩序攪乱期		秩序回復期	秩序安定期	
状態	大揺れその時・破壊・崩壊(生存目がけて孤独な戦い)	脱出・克服(その時その場を共有する人々の共闘)	共生・再会・出会い・参加(ボランティア)との「結」	組織的本格支援・援助の始まり・インフラ一部回復	インフラ本格的回復、仮設的定住化、喪った者・物への強い喪失感、支援者・物資の大量流入と混乱	生活の安定を求めて旧定住者離散の始まり	国・自治体などによる生活支援の本格化・被災者間の関係混乱
経過時間	発生直後から3分～15分	16分から24分	25分から96時間(4日間)	97時間から144時間(6日間)	145時間から240時間(10日間)	241時間から六月(半年)	半年以上～
問題							
罹災者の不安心理	ともかく助かれれば良い、生きられるかそうでないかが問題だ	貴重な物を持って逃げるか、それとも身一つでともかく逃げるか	みんな無事か、家に置いて来た物は無事か、食事、トイレ、水などの困難が続く、ガソリン、電池など不足、子どもは静かにせねばならず、子どもの居場所の確保が必要、乳幼児のケア	避難所が住みづらい、うるさい、灯りが付きっぱなし、トイレがない、風呂にゆっくり入れない。夜間建物も周りや道路が暗い、灯りが少ない、性的被害を受けないか、子どものストレスが高まる、	早く一人あるいは家族だけですごしたい、持っている物を盗られないか、自転車や自動車が盗られる、知らない人が一気に増え不安を強める、急に親切にされるのも気持ちが悪い、リーダにしっかりしてもらいたい、子どもの勉強、遊び場の問題、子どもの居場所が必要	不安が高まる、住民間のストレスが強まり些細なことでもめ事が起きやすい、子どもの勉強、遊び場の問題、子どもの居場所が必要	避難地・仮設住宅から離れる人が排出し、孤独感・疎外感・被害者意識を強める、将来の生活不安が強まる

表1 大地震と諸問題の関係(清永奈穂作成)

(注)1. 地震発生地を抱える16道府県警察が出した地震発生年統計の「月別集計」を集め分析及び作図の基礎資料とした。特に大地震発生「月」の犯罪発生状況を表していると見られる「犯罪マップ」を複数月に渡り集め分析し、基礎資料とした。3. こうした警察統計資料の他に、各道府県警察で内部的に語られている現地状況を克明に書留めた。4. 同様に全国から派遣された自治体職員、教員、ボランティアなどから徴収し得た状況も「補足資料」として積極的に活用した。以上の資料を基とし、大地震下から5年間の状況を再現することを行ったのが本図である。線のぶれは、情報に基づいて推測される状況のぶれを表している。©株式会社ステップ総合研究所 2024 禁無断転載コピー

- ① 地震で亡くなる人のほとんどは地震発生直後から数十分の間
- ② 大地震でも無差別ランダムに死者は生じてない
- ③ 実際に亡くなる人の多くは高齢者
- ④ 喪ってならないのは未来のある子どもたち
- ⑤ 特に子どもたちは災害弱者であると同時に、犯罪弱者として危機に曝されている
自然災害弱者+犯罪弱者=災害防犯弱者
(自助力の低い高齢者・障がい者・子ども・女性、外国の方)
- ⑥ 当然だが時間をおいて、危機は変化していくことを念頭に支援する必要

2. 被災した児童、保護者、被災した学校の声(一部)

① 2024年1月

- ・電池が足りません。ガソリンありません。助けてください(1月2日)(保護者)
- ・家族がみんな無事でよかった。それだけでもよかった。(児童)
- ・何も持たずに逃げた。命があればなんとかなる。(保護者)
- ・避難所になっており学校が再開できない、これでよいのか(学校)
- ・次々支援が来るが、支援する方々で引継ぎができておらず、度々から説明が必要。(学校)
- ・友達に会いたい(児童)
- ・これからどうなるのか不安(保護者)
- ・ずっと(避難所で)静かにしていないといけない(児童)
- ・僕もおじいちゃん(静岡)に行く。みんなもどこかに行っているから行く(児童)
(写真:清永奈穂撮影 2024年2月)



②2024年2月

- ・家がほとんどが崩壊してしまった。これからは不安。(保護者)
- ・栄養が心配(保護者)
- ・ピザなどの炊き出しは、子ども達は喜ぶけれど体が心配
- ・フルーツが食べたい。でもこんなこと言えない(児童)
- ・いつもお腹いっぱい(炊き出しで)(児童)
- ・子ども達がボランティアの様子を見る機会が欲しい、何か手伝う機会が欲しい、せっかくだから手伝えたい(保護者)。
- ・僕も手伝いたい(児童)
- ・静岡に避難させたのは、息子が自分で言い出したんです。みんなどっか行っちゃったから。一人でも行く?ときいたら、うん!と。最初はすぐ、迎えに来てとでも言いたすかと思ってたけど、おじいちゃんに厳しくしつけられたようで、洗濯物がたためるようになって帰ってきました((笑))(保護者)

・避難所に帰ってきてからは、近所の女の子といつも一緒に体操も参加して、避難所のアイドル見
たくなっていました。子どもらがいたことで間違いなく癒しになっていました。(保護者)

③2024年3月

- ・夜、ご飯を食べずに砂糖(スティックシュガー)をなめている子もいる(地域住民)
- ・夜眠れない(児童)
- ・ごはんいらない。夜カップラーメンを食べる(児童)
- ・スマホばかり見ているのがつらい(児童)
- ・何とか卒業式をちゃんとしてあげたい(学校)
- ・友達と離れ離れになるのが寂しい(児童)
- ・(子どもたちに)必ず、帰ってこられるような町にするから(地域)
- ・卒業式に出るにもお化粧品もない(保護者)
- ・この袴だけは無事でよかった。最後の卒業式に着ることができる。子どもたちを送り出すことができる(学校)
- ・今日は友達と遊べたから夜スマホ見ないで眠れた(児童)。



(写真:清永奈穂撮影)

④2024年9月・通学路が怖い、学校にいけない(児童)

- ・山が崩れた。学校にいけない。送迎バスを出してほしい(保護者)
- ・避難所は嫌だから家にいる。(児童)
- ・家に帰れない(部活で他の町に行っていて、帰り道が崩壊)(児童)。
- ・水、コメ、しょうゆ、器、箸、軍手、サラダ油、味噌がないので届けてほしい(地域)
- ・なんでまた、、、(保護者)

・やっぱり落ち込みます(保護者)

・学校近くの川沿いが、大規模土砂崩れで、まったくめどが立ちません今、唯一の道も本当は地震の後は危ないので、緊急車両のみ通行可能となりました。もし、通るなら、何かあったら自己責任だと聞いていた道を通っている状況です(保護者)。

・なぜ大谷に戻れないかという、通学路が危ないから(保護者)。

・校庭は仮設、道は危なくて遊び場がない。(児童)。

・早くここを出ろ、山が動いている(地域)。

・学校を避難所にするならば、やるべきことはたくさんある(学校)

・学校を避難所にしないでほしい(学校)。学校以外でできるようにしてほしい。

・民間主体の取組み推進も大切ですが、どの子どもも毎日通う学校が何より居場所でありたいもの。そんな支援もぜひお願いしたいものです。(研究者)

・学校の先生への支援が必要。だが中途半端な支援はらない(学校)



⑤2024年10月

・もっとここに住む人や来る人が多くなってほしい(生徒)。

・このままでいい(児童)

・もっと都会になってほしい(児童)

・この大谷のガチャガチャ(写真)をしてもらって、復興に役立てたい(生徒)

・子供のためにはやはり居場所があるのはとても重要だと思います。

特に子供というと幼児から小学生までの遊び場という形が多いですが、中高生の一番繊細な時期に集まる場所がないのは大変だったと思います。

特に避難所に人数が多い中で場所によっては子供はうるさくならないようにとただただゲームをしているような状況は見かけました。

避難所で(学校の場合特に)子供のための部屋を設けて欲しいなと思います。(これには教育委員会の許可が必要でそのためとても難しい状況です。何で国としてこういう緊急事態の時にもう少し教育委員のほうも融通が効くような状態にして欲しいです)(保護者)

・なぜ学校に子どもの場所ができないのか、理由は分かりませんが多分教育委員としては学校を運営することに義務があるからではないでしょうか？

なので給食室もこんな緊急でも使えませんでした。これは自治区によっては使ってもいいところもある(?)ようですが、このように一年以上渡って避難所生活となってしまったケースがこの町であって、避難所がありながらももう少し融通聞かせた学校運営なのか避難所は別の場所にするべきなのか、



色々今後のためにも考えた方がいいとは思いますが。(保護者)

・できることなら帰りたい(金沢に、避難している保護者)。子どもが転校先でなじめない。つらい。(保護者)。でも、通学路が怖くて帰れない。

・(もといた学校から)行事のお知らせなど来るが、泊まる場所もない。道も怖い。

(保護者)

・(珠洲市の3月までいた学校に)帰りたい。今度の運動会は必ず行く。(生徒)

・地域の核は学校(地域)

・学校を残すのが地域が元気になる(地域)

・学校は残したい。震災遺構も残したい(地域)

・学校があるから、地域に戻れる(保護者)

・今の転校も大変(保護者)

・新しい学校になれるのに時間がかかって、戻れるなら戻りたい。(生徒)

・金沢に住んでみたら、ここじゃなくてもいいっていうか、、、故郷は特別(保護者)。

・でも、大谷をみると、悲しくなる。いきたくてもいけない。子どもは行きたい(保護者)



・今だから言えることをいいます。度重なる余震、避難所でのインフルエンザ、コロナの発生、子供たちの心労、また冬の発災のため、雪の影響など考え、金沢への避難を1月5日ごろから模索、しかし、金沢に行くまでの道が土砂崩れにより通行止めとなっていたため、広域避難できず。

9日夜 ホテルへ到着、以後金沢市内にて広域避難。断水と国道249号線通行止めのため、広域避難を続ける。しかし、自宅は一部損壊のため、仮設住宅に入ることができず、金沢にて、みなし仮設(一般のアパート)に入居を決める。

9月21日の豪雨により、再び被災。

断水、停電の復旧の見込みなし。通行止めは継続。自宅は半壊となる。

<中学校>

珠洲の自宅は、国道249号線の大規模土砂崩れのため、通常車で10分で行ける小中学校

へは、片道約1時間半かかる状況となった。

また、珠洲市内からO小中学校への山道が雪の影響もあり、かなりの悪路となり、危険を伴う状況でもあった。

発災時から土砂崩れのため、学校に行くことができず、学校からは、情報が全く入ってこない、テレビやネット、避難所にいるPTAや、から情報をもらう状況が続く。

1月中旬より、珠洲市内で学校再開をテレビで知る。

でも、広域避難を県は呼び掛けているのに、学校を再開すると聞いて、どうしていいかわからない状況になった。

学校再開といわれても、学校周辺が危険で避難している、

避難所での生活は子供たち無理といっている。もちろん私も同意見。

また、一部損壊のため、仮設住宅に入れることはないから、このままアパートにいるしかない、などどうしたらいいのか？わからない状況が続く。

今後の学校に関しての状況などがまったくわからず、どうしていいか途方にくれる状況に・・・

子供たちは、夜寝れない、不安のため、一緒にねるようになる、いらいらする、

何もすることがないので、ゲームばかりするようになる

(注意すると、友達もいない、学校もない、することがないのでどうすればいい？といわれ、どうすることもできなかった)

(写真 清永奈穂撮影 隆起する学校前の海岸)



1月21日、金沢医王山にて、中学校集団避難 始まる

しかし、一週間で親元に帰る。同じ学校の同級生がいない中での参加が負担だった、また、親元から離れることが不安だったと思われる。

この集団避難も学校から直接連絡なく、PTAラインからの連絡で知る。

紙1枚での案内で親、子供への周知も不足していた。(先生方もほとんど内容をしらなかった)

医王山から帰ってきてからは、O小中学校とのオンラインでの授業を受ける。

オンラインでつながっているため、規則正しい生活に戻り始めるが、動かないので、運動不足となり、それが欲求不満となり、段々といらいらするようになった。

小学生は富山から珠洲のO小中学校まで週に1,2回連れていき、中学生を週末広域避難している富山から、医王山センターまで迎えに行き、週末富山のホテルで過ごすという長距離移動をしている家族もいました。

小さい学校の場合、かなり早い段階で広域避難するならば、学校単位で避難を考えてくれてもよかつ

たと思います。

避難所での生活は子供によって過酷なため、発災から1週間たつと一家族、一家族と広域避難する家族が出てきました。

○ 小中学校は、13 家族中、10 家族が転校となりました。

どうしても、新学期が始まる3月中には転校するか決めないといけない、でも、どうしたらいいのか、断水解消の目安や、停電の解消の目途、道路復旧情報がない中、右往左往しながら、転校を決めたと聞いています。

老人の相談場所は沢山ありますが、震災時、子供がいる家庭の相談する専門の機関があればと思います。

< 高校性の場合 >

1 月は高校も同じく、情報が無い状況が続いていた。

2 月初旬から、金沢にて広域避難している奥能登の生徒が一同に集まり、オンライン授業が始まる。

しかし、いつまでオンライン授業があるのか？全く知らされず、広域避難している生徒はどうしたらいいのか不安な時期を過ごす。

全く、今後の予定が示されず、珠洲にも戻る目途もたたないので、転校を考える。

県の方に電話すると、高校は所属している高校と直接電話してほしいと言われる。

それ以外の対応はなかった。

高校に転校の旨を電話で伝えると、事務員一人に対応しているため、忙しいと言われる → 対応できないなら、通常業務をボランティアなどに委託し、対応する人数を増やすようにしてほしい。

忙しくて、生徒の対応ができないのは、子供の将来がかかっているのにおかしいと感じた。

直接高校に行って、転校の旨を伝えると、県で一括して転校先を決めるから、自分のいきたいところには行けないと思え、と言われ、それでもいいなら転校の手続きをすと言われた。

対応が冷たすぎる。

ここでも、非常時の相談場所がほしいと思った。

3. 防災教育について

学校で行われている現状の避難訓練は、実施率が高いものの内容は形骸化している。、地域の災害リスクや「自分は大丈夫だ」と思い込んでしまう正常性バイアスなどの知識を教えること



や、教職課程に防災教育の指導法を組み込む、地域と学校が連携して防災教育を支援するなどが進みつつあるが日本全域ではない。

通常の学校の訓練は、①潜る、②急いで逃げる、に焦点を当てており、おさない、かけない、しゃべらない、もどらないといった、「その時」よりも「その後」に焦点を置いている。

しかし、危機がおきた「その時」に命を守れるか、慌てないで、おちついて揺れている時にたえることができるか、というところが実はとても大切である。。

現在高校段階までにはほとんどの生徒は対地震の安全教育を受けてきているが、その内容は「学校での避難生活」中心で、「在校時における安全確保学習」(机の下に潜る、安全に教室外に出る、通学路での対応等)が多く、広域・多様に及ぶ実際の生活領域をカバーする安全教育は殆どなされていないのではないかと懸念される。

その結果、大地震に直面した生徒の6割は「とにかく逃げる」、3割強は「考えることなどできなかった」状態に陥り、揺れの始まり期にどうにか対応しても、その後も心理や行動の動揺は続き、「しゃがみこんでしまう」か「何もできなくなって」しまう、あるいは動きが固まってしまった者が輩出した。

さらには地震時の基本知識である「どういった建物が倒壊の危険性が高いか」といった基本知識の形成がなされておらず、たとえば学校の体育館(高い耐震性能を有する)から「外に」そのまま「飛び出した者」も出ている。生徒の多くは、地震時の基礎的行動の知識の学びがなされていないのではないかと推測される。悪く云えば、そうしたことは小中学校で済ませており、高校では「年齢」も行き「身体能力も高くなっている」と判断されることから、学ぶ必要が無いと考えられて可能性のある事がうかがえる。そうでないことは本調査の生徒たちの心理や行動からうかがえる。

結論として高校段階でも、これからも生じてくるであろう群発する地震に備え、「地震からの安全確保」に関する実践的な体験型安全教育体制を整えることを提案する。

(珠洲市立飯田高校調査(2023年5月実施) (株)ステップ総合研究所)